

歴史的 不定法に見られる 動詞的性格と名詞的性格

福 本 直 之

緒言 拙稿においては、表題の如く、歴史的 不定法に見られる二つの文法的性格に就いて触れてみたい。その一である動詞的性格を観察するために、ここでは歴史的 不定法に見られる時制的観念を取り上げてみた。その二である名詞的性格は、歴史的 不定法と同等の機能を果す名詞的表現、所謂 *proposition nominale* あるうは、*Nominalsatz* との関係において観察した。歴史的 不定法の備えているこの両側面のうち、多くの文法家の着目しているのは、単に動詞側の側面であり、名詞的側面への考察は未だ充分になされていないと思えない。というのも、歴史的 不定法のフランス語における起源、発生に関して、Ph. Marcou が一八八八年に従来の *latinisme* 説を否定して発表した有力な説が、命令法 不定法に歴史的 不定法の源をおいていることが一つの理由として挙げられるのではないかと思う。とはいうものの歴史的 不定法を名詞的表現であるとする説も一九〇九年に既に J. Haas によって紹介されているが、当時余り諸家の関心を惹くことなく、また J. Haas 自身も問題を提示するに

留め、この問題をさらに発展、展開させようとしなかったために、歴史的 不定法の名詞的側面の観察は、一九三〇年代に入って二人の優れた後継者を得るまで、本格的な研究対象として取り上げられることはなかったようである。この二人の後継者の一人は著名なドイツのローニスター、Leo Spitzer であり、他の一人は、*L'infinif de narration dans les langues romanes*, Uppsala (1936) の著者 Alf Lombard である。この著は、表題に示された如く、ロマンス語における歴史的 不定法の考察を初めて総合的に行なったものであり、筆者も全ゆる面で教えられるところ多大であったので、特に冒頭に書名を挙げて敬意を表する次第である。

※なお、既に発表した拙稿、「話法 不定法の歴史的考察」(フロンティア第九号掲載)並びに「Observations sur l'infinif de narration chez La Fontaine」(日本仏文学会欧文学会誌 No. 9 所載)をも併せて参照されたい。

歴史的 不定法がどのような文体的価値を有しているか、どのような

な表現法としての性格を備えているかについては、既に大方の見解は一致しているし、またそれに異論をはさむ余地はない。つまり一言にしていえば、この簡潔にして印象的な表現法は、描写に一段の生氣を与え、常にそれに先立つ動作・行為の帰結を示すのに用いられているのである。歴史的不定法が、起、承、転、結の結部に用いられ、その描写を生氣に満ちたものにするという事實は、全ゆる時代の用例の観察を通じて是認し得る第一次の性格として認めねばならない。同時に、歴史的不定法が帰結を示すのに用いられているという事實は、文の前後関係によって結部に歴史的不定法の使用が導き出されるのである以上、単に歴史的不定法が生氣に満ちた描写におかれていたのみならず、文中の因果関係の及ぶ、起承転部に對してもまたこれらの描写がかなり生氣に満ちたものであることを物語っている。つまり Eugen Lerch の言葉を借用すれば、歴史的不定法を含んでいる一連の文章においては、「話し手が聞き手に得る限り生き生きと過去の出来事を物語り、聞き手の眼前に彷彿せしめようとしている、そのような表象が描写されており「歴史的不定法で示されている表象は」その vivacité の頂点におかれてゐる」ということが出来るのである。

そしてこのように、描写に一段の生氣を与え、過去の出来事をより生き生きと読者の眼前に彷彿せしめるが如く物語るための表現法としては、歴史的不定法以外にもいくつかの時制を挙げる事が出来る。歴史的現在と呼ばれる直説法現在をはじめ、歴史的過去としての單純過去、描写的、あるいは繪画的などと名付けられている未完過去などが正にそれである。

實際、これらの三つの時制のいずれかが、歴史的不定法と相前後して用いられている事實は、これら三時制と歴史的不定法との密接な關係を物語っている。

例を挙げてみる。

1) Mais qu'est ceci? Mon sac est plus lourd que la veille...

Ahi bonne-hôtesse! Oh! chère vieille, pourquoi tant me gêner, pourquoi? Et la bonne vieille de dire, moitié larmes, moitié sourire: "J'ai mon gars soldat comme toi!"
—Paul Deroulède

2) Il tira violemment le cocher stupéfié par la manche de son habit, et il lui cria l'adresse de la rue Leopardi d'un ton si impératif que le cheval recommença aussitôt de trotter comme dans la première course, et la voiture de filer lestement dans le dédale des rues.
—Paul Bourget

3) Un médecin consultant ses fiches et disait: "Tu as une plaie au bras droit? Et l'homme de répondre avec modestie: "Oh! ce n'est pas une plaie, c'est seulement un trou."
—Georges Duhamel

そして、これらの用例における歴史的不定法は如何なる時制的觀念を持ち得るのであろうか。諸家の見解はこの問題に関して、かな

り大きく分れている。いま、便宜上大別してみると、歴史的不定法

が如何なる時制的観念を取り得るかについては、

(1) 過去時制、特に單純過去に等しいとする説。

J. Marouzeau, M. Grevisse, etc.

(2) 歴史的現在に等しいとする説。

Grammaire Larousse, Lasserre et Grandjean, etc.

(3) 未完了過去に等しいとする説。

G. Ramain, H. Sensine, etc.,

(4) *contexte* によって定まるとする説。

F. Brunot

(5) 全く存在せず、むしろ名詞的表現とする説。

Le Bidois, M. Cressot, etc.

等の諸説を挙げ得るのである。もう少し敷衍してみると、(1)のような時制が歴史的不定法のそれとして挙げられていることは、前述の理由からも大いに肯けるのであるが、ここでは何故このような時制が歴史的不定法のそれに等しいものとして文法家の定義するところとなつてゐるのかを考えてみたい。

フランス語におけるとほほ同様の性格、機能、用法を備えていたラテン語の歴史的不定法が、その根底に起動的アスムクトを内蔵していたことは、既に G. Ramain の論文によつても明らかである。そしてこの起動相が多少拡大されて、継続、未完了をも示し得たため、五世紀末の Priscien などがこれを *imperfectum* な時制として説明 (*coppi*) (1) なる語を補つて考へた。そして後述するやうな省略法によつて歴史的不定法を解釈しようとする方法は、現代にま

で及んでゐる。

しかしながら、少くとも、フランス語において、継続、未完了相を示すのは単に未完了過去だけではなく、歴史の現在を用いてもこの条件は満たされる。ラテン語の仏訳において、例えば Vangelas の "Quitus Curtius" (1659) 仏訳にみられるラテン語の歴史的不定法をフランス語では歴史の現在に訳している事実からも、前述の如き歴史的不定法と歴史の現在の密接な関係は推察でき得るのである。

歴史的不定法の時制的観念に等しいそれとして、單純過去をもちて説明しようとする試みには、十七世紀の文法家 Charles Maupas の意見がかなりの影響力をもつてゐるに思われる。彼 Maupas は、その著に「歴史的不定法は *sudaineté* et *hasivité* d'action を表すのに用いられる」と記載してゐるが、この見解は現代でも F. Brunot をはじめとする多くの文法家の採るところである。Karl Vossler も「新百話」の二例を取り上げて次の如く解釈するのが最適ではないかと述べてゐる。

4) Tantost qu'elle fut partie et bon mari de monter à cheval et par autre chemin que celui que sa femme tenoit, picque tant qu'il peut au Mont Saint-Michel. Livre II, nouvelle 65

5) Tout à ceste belle heure que ces armes se faisoient, vécy bon mari d'arriver, ... Livre I, nouvelle 43

即ち、4)においては、“da stieg auch schon”（既にもう乗って来た）、5)においては“da kam auch schon, wie zu erwarten war”（あたかも予期された如く既に来ていた）。しかしながら、この二例においても、歴史的不定法の使用そのものが *rapide d'action* を示しているかどうかは甚だ疑問である。フランス語の歴史的不定法は元来根底に何らのアスペクトも備えていないし、この二例で歴史的不定法におかれては動詞 *monter*, *arriver* から瞬間相のようなアスペクトが窺われないう限り、この二例で *rapide d'action* の観念を導き出すものは、動詞そのものではなく、*contexte* が生み出すと考える方が妥当ではなからうか。即ち4)では *tantôt que (= aussitôt que)* という副詞句が、5)では *tout à cette belle heure* が動詞 *arriver* のアスペクトを規定し、*rapide d'action* を示す役割を果しているように思えるのである。

このように歴史的不定法の時制的観念を単純過去で説明しようとする試みにおいて、常に、*rapide d'action* のニュアンスが伴われているが如く考えるのは誤りである。なるほど歴史的不定法が、このようなニュアンスを伴う場合も非常に多いことは事実であるが、それはあくまでの歴史的不定法の文体的性格としては、第二次的性格に属するものであって、そのために必ずしも単純過去の助けを必要とするものでないことはいうまでもない。

Litté のように、歴史的不定法を省略法で説明しようとする人達にとつては、単純過去はまた歴史的不定法の時制的観念に一致する時制として取り上げられている。彼等はこの不定法の前に、*commencer, se hâter de* 等の動詞が省略されていると考え、例えば

⁽¹³⁾
Litté は “aux de courir” を “(ils) commencèrent de courir” だと説いている。しかしながら、元来存在しない動詞を補ってみたり、歴史的不定法におかれた動詞に、起動的アスペクトを勝手に附加したりすることが、問題の解決に何の役にも立たないのはいうまでもないことである。

前述の事項を要約してみると、歴史的不定法は、一連の生氣に満ちた描写の文章中に用いられ、その頂点を示す役割を果している。そして歴史的不定法を含む前後の文章においては、同じく生氣に満ちた描写をするために、歴史的現在（直説法現在）、歴史的過去（直説法単純過去）、描写的、あるいは絵画的未完了過去（所謂直説法半過去）のいずれかが、歴史的不定法と密接な関係をもって使用されている。そして *contexte* によつては、歴史的不定法が *rapide d'action* を示している場合もかなり見受けられる。

ここにおいて注目すべきは、歴史的不定法と非常に親しい関係にある、この三つの時制に共通した性格である。即ち、この三つの時制はその文法的形態、分類が現在の範疇に属するものであれ、過去のそれに属するものであれ、三時制とも、超時的性格をもった話法的動詞であるということである。つまり、過去、現在、未来といった時間的因果関係には何の制約をも受けず、単に過去の物語を生氣にみちて描写するという話法としての機能をのみ与えられている超時的時制なのである。そしてかかる性格である故に、この三時制と、元来何等時制的観念をそれ自体は持ち合せていない歴史的不定法との間に密接な関係が生じ得るのである。

そして、この両者の間の密接な関係は、当然のことながら、F.

Brunot の 2 卷の 文脈に 2 卷の 不定法を 用いた 例がある。その 例は 上の 文脈に なる 語の 概念を、文の 構文上の、ある 論理上の 関連を 持つ 不定法を 前後関係で 解釈した 場合、次の ような 用例が 出ては、歴史の 不定法は、前述の 如く 超時的な 所謂 語法動詞との 関係以外に、半ば 独立して 独自の 時制的 観念を 構文上、論理上、最も 密接な 関係をもつ ことになり 得る 他、人称動詞の時制が、1 時的に 借用して 用いた 例がある。

6) Oh! quantes fois ils m'ont enivré! car vous pouvez entendre que j'aime le piot, que voulez-vous? et puis de me mettre à dormir tout le long de la belle nuit.

-Noël du Fail (Leo Spitzer)

7) Enfin donc, je n'avons pas plutôt engagé que j'avons vu les deux hommes tout à plain, qui nous faisant signe de les aller querir; et moi de tirer auparavant les enjeux.

-Molière: Don Juan

8) Alors hurlements de cesser, pantomimes lugubres de disparaître, larmes comiques de tarir; on aura honte d'avoir applaudi à des comédies larmoyantes.

-Antoine Sabatier (Brunot)

9) ...et il cherchera à nous noircir dans des libelles infames, et les méchants d'applaudir... Et il mettra notre honneur à l'encaen comme la tunique immaculée du chrisit et chaque imple d'en arracher un lambeau.

-Emile Gaboriau: La soutane de Nessus

10) ...et cette course de durer jusqu'à ce que... tous deux s'arrêtaient. Denis Diderot: Jacques le Fataliste

11) On ne parlait chez lui que par doubles ducats;/Et mon homme d'avoir chiens, chevaux et carrosses;/Ses jours de jeûne étaient des noces. -La Fontaine: VIII, 14

12) J'ai jamais tant peiné de ma viel' c'te dame et ce monsieur m'ont fait asséoir sur une chaise; et puis les v'là de causer et de disputer à chaque air que je leur disais. -George Sand: Lettres

13) Et chaque fois que je chantais cet air-là, elle de me demander ci et ça. -Goncourt: Journal (Sandfield)

14) Deux fois, Kupérus avait demandé à la servante: -- Il a trouvé du travail? -- Et elle, simplement, de répondre: Non! -Georges Simenon: L'assassin

15) J'entends encore sa voix: "Combien y a-t-il de bataillons dans un régiment?" Pour faire bonne mesure, j'avais répondu: "Six, Monsieur." Et le vieil homme de soupirer. "Non, mais ça ne fait rien..." -Georges Duhamel: Les sept dernières plates

右の引用した用例を観察してみると、(2)の概して L. Spitzer が歴史的不定法の時制的観念が複合過去と相対して用いた場合と同じで、その場合もあるが、これを全く同様の場合と認める。②は F.

Brunot⁽¹⁵⁾が単純未来の場合として引用している。論理的な *contexte* から見た場合には、9)の用例の方が単純未来としての色彩は鮮明である。10)、11)においては、継続、習慣の半過去(未完了過去)を想起し得るし、12)、13)の場合は、前者より派生した反復の半過去(未完了過去)とみなされる。14)、15)の用例からは、構文上の *contexte* が歴史的不定法に大過去に相当する時制的観念を貸与しているのが窺われる。

以上のように、歴史的不定法を含む一連の文章中における他の人称動詞との対応関係から、歴史的不定法の時制的観念を観察してみると、元来何等の時制的観念をもそれ自身持ち合せていない歴史的不定法が文中の *contexte* によって一時的に借用していると考えられる時制の問題は次の二つの場合に大別できるのである。

(一)は用例(一)～(三)にみられるように、時制の形態が現在であれ、過去であれ、用法上、時制的観念をほとんど伴わず、むしろ超時的、話法動詞としての性格のみを備えている、所謂、歴史的現在、歴史的過去、描写的、絵画的半過去の場合で、描写に生氣を与えるという歴史的不定法の本質的機能を満たしている第一次の用法に属している場合。そして論理的な *contexte*⁽¹⁶⁾より、歴史的不定法が *rapide d'action* を示している場合、この場合必ずしも歴史的不定法と対応する動詞が単純過去とは限らないが、これはこの第一次の用法から派生した用法と考えられる。

(二)は、(4)～(15)の用例にみられるように、多くは、構文上の *contexte* からみて、歴史的不定法の時制的観念が、それと対応すると考えられる他の人称動詞の時制的性格にひきつられて、半ば独立し

た時制的観念を取らざるを得なくなっている場合で、用法としては極めて特異な、例外的用法に属するものである。構文上の *contexte*⁽¹⁷⁾から歴史的不定法の示す行為が *rapide d'action* を示していると考えられる場合、つまり歴史的不定法の時制的観念が単純過去に相当すると考えられる場合はこの用法に属するものと考えられる。

以上、歴史的不定法の備えている動詞的性格、要素を取り上げて観察してみたが、同時に拙稿では歴史的不定法が、不定法である以上当然のことながら、兼ね備えている名詞的性格をも併せ考えてみたいと思うのである。

既に Le Bidois が指摘しているように、歴史的不定法が動詞的性格を失った名詞的表現に近い表現法であるとする考え方は、勿論現在の時点では一つの仮説にはすぎないとはいえ、かなり多くの興味ある問題点を含んでいる。

先づ第一に注目すべきは、一般に人称動詞によって果たされる述部の機能が、人称動詞と全く価値、内容の等しい名詞的表現によっても果たされているという事実である。このような現象は、あらゆる言語において、如何なる時代からも確認されるものである。しかしながら一般的にいつて、動詞的述部の代りを行っている名詞的表現は、命令文、感嘆文、布告文、銘句、表題、俚諺等の文体での使用にほとんど限られているものである。しかしながら、以下の用例にみられるように、名詞的表現が、単に一個の行為を示す名詞によるものであれ、あるいは、前置詞や副詞の助けを借りた一群の名詞的

表現によるものであれ、これらの表現が何等動詞の助けを借りずに
独自で、行為や状況を描写したり、物語ったりする能力をもってい
る場合がある。

16) Alors, tous a genoulz, le seigneur de Saintré commença
à parler et dist :

-Antoine de La Sale : Jehan de Saintré, Droz. p. 236

17) Grand combats ; d'autres chiens arrivent.

-La Fontaine : Fables VIII, 7

18) Il obtint changement de fortune... Autre plainte. ib.
VI, 11

19) Belle tête... mais de cervelle point. ib. IV, 14

20) Il est sans énergie, sans volonté. Les plus beaux senti-
ments en parole, rien en actions ni en réalité.

-H. de Balzac (Lombard)

21) Ilz firent leurs adieux à tous, et en route. Lors tout le
monde à cheval. -Noël du Fail (Lombard)

22) Elle leur sonna une autre chanson, et gens debout.

-Rabelais : Cinq. livre, chap. 19

そして、このような名詞的表現にみられる特色は、この簡潔な表
現法が、特に行為を示す名詞による場合、前述の話法動詞の場合
や、歴史的不定法の場合同様、描写を一段と生氣に満ちたものに
してゐる点にある。そしてこの話法的、描写的性格をもつた名詞的表

現と、歴史的不定法との間の密接な関係は多くの用例の示す如く、
大いに注目しに値するものである。この両者の表現法においては先
に挙げた、文法的共通性は勿論のことであるが、文体的価値からみ
ても、ともに人称動詞を用いた場合には必然的に受ける、時法、人
称等の文法的制約から脱却して、純粋な行為そのものを、簡潔にし
かも生き生きと表現するという共通点をもっているからである。

この両者の密接な関係を示す用例は、歴史的不定法的全歴史を通
じて挙げられる。歴史的不定法の豊富な用例の見出される最も初期
の作品である「新百話」には、前述の如き名詞的表現が見出されな
いと報告されてゐるが、一般的にいって、名詞的表現を好んで用い
る作家からは、同様に好んで歴史的不定法が用いられているのが認
められるし、その逆に歴史的不定法を愛好した作家に、名詞的表現
が多いのもまた事実である。「新百話」には認められない、この両
表現法の共存は、しかしながら、Rabelais, Noël du Fail, La Fon-
taine, Saint-Simon 等におおづては、甚だ顕著であり十九世紀後半
の印象主義、自然主義作家からも多くの用例が報告されてゐる。歴
史的不定法を技巧的、文学語として縦横に用いた印象派の作家が、
同様に名詞的表現に対して示した偏愛も、この両表現法の密接な関
係を物語る一つの証左として注目しに値するものである。以下、歴史
的不定法と名詞的表現の密接な関係を示す用例をいくつか挙げてみ
る。

23) Lors Oudart se revesitir. Loyre et sa femme prendre
leurs beaux acoustremens. Trudon sonner de sa flute,

- batre son tabourin, chascun rite, tous se preparer, et guanteletz en avant.
- Rebelais : Le Quart livre, chap. 14
- 24) Soudain le bruit espars en la ville, cloches de tonner, chapitre de capituler, deplioier bannieres, peintres aux escussons et armoiries, menuisiers à la chapelle ardente, allumer torches, vestir de faux pauvres, accourir parfums, noircir eglises, tendre la biere et cercueil episcopal. Et Brusquet de rire et picquer par ces belles garigues de Provence.
- Noël du Fail : Contes et discours d'Eutrapel II p. 214
- 25) Pour vous le faire court, voilà l'arbre par terre; voici venir le mary : -Bonaventure Des Perriers: Nouvelles récréations et joyeux devis CXXXVIII
- 26) Rats en campagne aussitôt; /Et le citadin de dire : -La Fontaine : Fables. I, 9
- 27) Après les bons partis, les médiocres gens /Vinrent se mettre sur les rangs. /Elle de se moquer.../L'âge la fit déchoir. /Adieu tous les amants. .../Puis cent sortes de fards. ibid. VII 5
- 28) La princesse à ces mots ne se put plus contraindre.
Pleurs de couler, soupirs d'être poussés,
Regards d'être au ciel adressés,
Et puis sanglots, et puis soupirs encore : ibid. II 14
- 29) Aussitôt grande rumeur, et M. de Coislin à serrer le premier président du derrière de sa chaise, ... -Saint-Simon : Mémoires
- 30) Et Jacques de le réembrasser... et son maître de sourire, et les deux chiens debout, le nez en l'air...
-Denis Diderot : Jacques le Fataliste p. 393
- 31) Armand : A Genève, même rencontre... imprévue...
Daniel : A Chamouny, même situation; et le Perrichon de s'écrier toujours: Ah! quel heureux hasardi -Eugène-Marin Labiche : Voyage de M. Perrichon, Acte II scène 1
- 32) Singulière vie que la Nôtre, partagée entre les élégances du passé et les horreurs de notre temps. Nous voilà à étudier un accouchement cesarien,...
- Goncourt : Journal, 17 avril 1864
- 33) Et de courir à cet hôtel. Il frappe à la porte de son appartement. Pas de réponse...
-Paul Bourget : Nouveaux pastels, p. 196
- 34) Ici un soupir ; puis de reprendre : ... ibid. (Lombard)
- 35) Un appel de klaxon et l'autre de céder la voie.
-Tristan Bernard : Le voyage imprévu, p. 138
- 36) A ces mots, vague de rite, et le public de battre des mains, de taper des pieds.
-René Benjamin : Les justices de paix, p. 58

37) ..c'était l'époque où le Tsar Nicolas II allait faire son premier voyage en France. Plus de doute ! on se trouvait en présence d'un anarchiste déguisé. Et le brigadier d'envoyer aussitôt à sa recherche un gendarme muni de solides menottes. —Albert Dauzat : La langue française d'aujourd'hui, p. 205 (Nakahira)

先に述べた如く、名詞的表現と歴史的不定法の、このような密接な関係を初めて指摘したのは、J. Haas (1909) と P. Kretschmer (1910) の二人で、前者はフランス語における場合を、後者はドイツ語における両者の関係から理論を展開している。

J. Haas は何故か、その理論を發展させることなく、歴史的不定法が名詞的構文であるというテーマを出すに留めたようであるが、彼の説は L. Spitzer や A. Lombard また恐らくは Le Bidois とも大きな影響を与え、受け継がれているように思える。

A. Lombard は歴史的不定法で示される動作、行為、例えば「Et de fuir」は、人称動詞で示される純然たる動詞的表現「il fuir」と全く名詞的な「la fuite」のような表現の中間的存在であると述べ、動詞的表現から名詞的表現への推移過程に、「avoir」＋「行為を示す名詞」、例えば「il eut la fuite」による表現法を歴史的不定法のそれと併せ考えるべきだと述べている。

同様に Le Bidois も「grenouilles de sauter」という歴史的不定法による表現は、本質的には、何等「saut des grenouilles」という名詞的表現と異なるところがないと説いている。

主語部と述語部の並置である歴史的不定法という表現法を「丸太小屋」という言葉で形容している、L. Spitzer も、この動詞の名詞的形態ともいへば歴史的不定法による敘述を名詞的表現に加える性格のものと考へ、人称動詞が実際の事実を示すのに対し、歴史的不定法がひきおこしている一種の緊張感は、「tableau」としての表現価値をもつのだと指摘している。

歴史的不定法と名詞的表現の両者にみられる類似性は、細かく観察すると、なお、種々の角度から挙げることができる。例えばこの二つの表現法が、簡潔に、手短かに生き生きとした描写に用いられるために、次々と引続いておこった連続的動作、行為、あるいは同時におこなわれた多くの動作、行為を示すのに好んで用いられる事実や、両者に多くみられる、冠詞の欠如（歴史的不定法の場合はその主語で）なども一考の価値がありそうである。

既に挙げた用例からも分るように、十六、十七世紀においては所謂 *conteur* に用いられ、十九世紀では印象派、自然主義作家にみられる、この両表現法の共存から、歴史的不定法と名詞的表現の類似性、近似性は充分、推察されるのであるが、特に現代の文学作品以外の歴史的不定法の用例では、この特徴の著るしい場合が少くない。ここでいう非文学作品における歴史的不定法の用例とは、次の二つの用法に属するものことである。その一は Brunot-Brunet で指摘されている如く、新聞記者用語としてのそれであり、第二の場合は、筆者が「学者用語」と仮称している用法である。第一の新聞記者用語としての歴史的不定法の使用は、この表現法の簡潔

にして要を得た構文形態や、その意図的性格から容易に肯けるのである。そしてこのような primitif な、しかも極めて感情的な描写、敘述は、"Hindenburg-Reichspräsident" のよびに名詞の並置によっても充分に果される。

その第二の場合、学者用語としての用法においては、多くの場合歴史的不定法の性格は、第一の新聞用語の場合とは反対に、極めて冷静、無感情である。(勿論極めて感情的用法の場合も多いが)例えば次のような用例がどういふ、

- 38) Et Chateaubriand de conclure dans une note de son exemplaire confidentiel. —Victor Giraudi: Le christianisme de Chateaubriand, t. II p. 51
- 39) Et Marot de noter : —Louis Thuasne : François Villon t. II ed. Auguste Picard p. 143
- 40) Et Gaston Paris de traduire : ibid. p. 195
- 41) Et l'auteur de conclure : ibid. t. III p. 411
- 42) Aussi Villon d'ajouter : ibid. p. 575
- 43) Et Pierre de Nesson d'accumuler les arguments juridiques et les textes. —Pierre Champion : Histoire poétique du quinzième siècle t. I p. 87

歴史的不定法を示されてゐる行為は、何等の仕隨的条件なしで、単に事実の報告であり、多くの場合その具体的内容は引用符を用つた次に付加されてゐる。このよびな用例がどういふ例(39)の場合、

"note de Marot," 40) の場合、"traduction de Gaston Paris" と以外に解釈の仕様がなないように思える。実際これ等の注釈書における歴史的不定法の存在理由は、特だ noter, conclure, traduire 等あまりにも煩繁な使用を余儀なくされてゐる動詞の場合、単に人称動詞のくりかえしを避けるための手段であるとか考えられない。この種の用法によつて、"Et Marot de noter" は、"Et (voici) la note de Marot," と何等本質的に異なるどころではないのである。

しかしながら、このように歴史的不定法と名詞的表現が全く等質、等価値をもも得る場合は割合に少いといふことに注意すべきである。何故なら、元來極めて感情的な表現法である歴史的不定法は、「新百話」の時代から現代までの歴史を通じて、時代的差異や、用法上の相違はあつても、常に何等かの文体的性格、ニヤムス、を伴つてゐるからである。

一般的にいつて歴史的不定法の伴うニヤムスは、滑稽味、諷刺、皮肉、等のかなり、familier, populaire なものであるが、これ等の性格は、歴史的不定法の最も新しい使用分野であり、非感情的の用例も少くない、筆者のいつ、学者用語としての用法においても失われてゐないのである。例えば、次の用例で窺われる歴史的不定法のニヤムスは、極めて感情的である。

- 44) Et M. Brunot de conclure triomphalement que l'imparfait du subjonctif a fait son temps, qu'il est mort, bien mort, et que sans doute il n'y a plus qu'à le rayar de la grammaire! —Théodore Joran : Les manquemens à la

langue française, p. 69

45) On se rappelle la réponse de Nodier à Dupaty, qui prétendait qu'entre deux i le t avait toujours le son de s: "La règle est sans exceptions," répondit-il à Nodier. Et Nodier de répliquer, du tac au tac: "Mon cher confrère, prenez pitié de mon ignorance, et faites moi l'amitié de me répéter seulement la moitié de ce que vous venez de dire!"
—Philippe Marthon: Comment on prononce le français, p. 334

45) はかなり辛辣な *moquerie* (やあやう) 44) はかじり *défini* (ていぎ) のを含まない。

このような歴史的不定法が元来備えてくる性格、あるいはむしろ *ヒュブンス* を含むため作者がわざわざ歴史的不定法による表現を選んだという方が適當かも知れないが、を無視するにしても、*ヒュブンス* を伴わないかぎりこの歴史的不定法の独特な文体的性格はやはり、歴史的不定法という表現法を他の文法的、文体的、構文的類似性を備えた表現法、動詞的および名詞的表現法とあれ、から明確に區別しようの *critère* (よやく) である。

NOTES :

1. Eugen Lerch: Der historische Infinitiv, §178 dans "His-

torische französische Syntax" Leipzig 1934

2. J. Marouzeau : Précis de stylistique française, p. 145
3. M. Grevisse : Le bon usage, cours de grammaire française et de langage français, p. 571
4. Grammaire Larousse de XXe siècle, §407
5. E. Lasserre et J. Grandjean : Etude du verbe, §99
6. G. Ramain: Observations sur l'emploi de l'infinitif historique, dans "Revue de philologie" Paris 1914
7. H. Sensine : L'emploi des temps en français, p. 98
8. F. Brunot: La pensée et la langue, p. 478 chap. XIII 2
9. G. et R. Le Bidois : Syntaxe du français moderne, p. 471
10. M. Cressot : Le style et ses techniques, p. 145-6
11. Charles Maupas : Grammaire et syntaxe française, 3e éd. Bloy's M.DC.XXXV. (Possession de Bibliothèque Tenri)
12. Karl Vossler : Frankreichs Kultur und Sprache, p. 171
13. Littré et Beaujean: Dictionnaire de la langue française, 16e éd. dans l'article de "DE"
14. L. Spitzer : Zum französischen historischen Infinitiv, p. 541 dans "Zeitschrift für romanische Philologie" L 1930
15. F. Brunot: Histoire de la langue Française, des origines à 1900, Tome VI : Le XVIIe siècle p. 1820
16. par exemple : Dans le moment qu'ils tenaient ces pro-

pos./Le lion sort, et vient d'un pas agile./Le fanfaron
aussitôt d'esquiver;/"O Jupiter, montre-moi quelque asile,/
S'écria-t-il, qui me puisse sauver!"

—La Fontaine : Fables, VI 2.

17. Cf. l'exemple 4), 5).

18. J. Haas : Neufanzösische Syntax, Halle, 1909

19. P. Kretschmer : Zur Erklärung des sogenannten Infinitivus historicus, dans "Glotta" II 1910

20. A. Lombard : *ibid.* p. 212

21. F. Brunot et Ch. Bruneau: Précis de grammaire historique de la langue française, p. 541